

---

# 覚悟

シュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

覚悟

### 【Nコード】

N9307S

### 【作者名】

シユウ

### 【あらすじ】

優作が新一と散歩中に、殺人現場に遭遇した。

生まれて初めて、殺人現場を見た新一は？そして、その時優作は？  
工藤新一、8才の過去話です。親子の絆と、その覚悟とは。

**(前書き)**

遺体について、若干グロ表現があります。苦手な方はご注意ください。

夕方の、薄暮の道を。

子供を抱いた父親が歩いている。

何も知らない人が見たら、単に遊び疲れて眠ってしまった子供を抱いているようにしか見えないのかもしれない。

しかし。

よくよく見れば、子どもの顔色は悪く、抱かれている、というよりは、しがみ付いている子供の体が震えているのに気付いただろう。

「……新一」

「……」

父親の問いかけにも、子供は応えない。

父親　工藤優作は、腕の中の我が子を見やった。  
そして、どうしたものか、と考えを巡らせていた。

殺人的な締切りラッシュを切り抜け、ようやくフリーな休日を迎えられたこの日。

久しぶりに散歩でも、と出掛けようとする、ちょうど学校から帰宅した息子が一緒にいてきた。

もうすぐ8歳を迎えるの息子は生意気盛りだ。

子供向けの簡単な本が読めるようになって以来、これも血筋かホームズにハマり込み、今では一端のホームズオタクであり、「探偵」

と言う職業に憧れを抱いている。

最近では、時々警察に協力を求められる優作が現場に向かうのに、付いて行きたがるようになってきていたのだが。

事件体質なのは自分かこの息子が。

散歩の途中で、殺人現場へ出くわした。

そうならば、旧知の刑事に協力を求められてしまうのは、もう、必然としか言いようの無いコトで。

「新一はここで待っていないさい」

優作は黄色いテープの外側で、息子 新一の小さな背丈に合わせて膝を屈めていた。

「まだ、君にに本物の現場は見せられないよ。子供が入り込んでいい場所じゃない。わかるね？」

優作は子供と視線を合わせると、そっぴい含めようとした。

「でも、父さん、ボクは将来探偵になりたいんだ。父さんみたいに犯人を捕まえる手伝いがしたいのに！」

いつもなら聞き分けの良い子供である筈の新一が、めずらしく駄々を捏ねる。

しかし。

早々許せるものでもない。

大体、まだ小学生の子供に、殺された遺体など見せられるわけがない。

「ダメだよ。これは物語の中の事件じゃない。ここで待っているんだ。いいね」

優作の厳しい表情に、新一は黙り込んだ。

……尤も、不満であるのは一目瞭然、といった顔をしていたの

だったが。

現場は、アパートの1階にある一室である。

被害者の男性は、絞殺されたらしい。

ソファに座っている所を後ろから絞められ、そのまま崩れ落ちたのだろう。その体勢のまま、今は冷たい骸となって、床に転がっていた。

優作はひと時、黙祷を捧げると、早速遺体の検分にかかった。

血の気の引いた、青白い顔。

苦悶の表情がまだ残る。

未だ閉じられない目は血走り、虚空を見つめ。口元から飛び出した舌が覗いて。

首に青黒い索状痕。今際の際に縛めから逃れようとしたのだろう、吉川線。

凶器と思われるロープが、首元に巻きついている。

何か不自然な所は見受けられないか、と遺体の反対側に回り込んだ所で、優作は現場の異変に気付いた。

外で待つように言い聞かせた筈の新一が、部屋の隅に立っていた。

迂闊にも、新一が入り込んだのに周囲の大人は誰も気付かなかったのだろう。

まずい、とは思ったが、既に新一は、瞬きもせずに遺体を見つめていた。

親戚の葬式にも出た事の無い子供だ。勿論、遺体を目にしたのはこれが初めての筈。

子供の興味本位で覗いたモノとしては、あまりにも凄惨な、それ。

既に思考は停止しているのだろう、新一の体は固まったままだ。

とにかく、この場から遠ざけなければ、と思った優作は、新一を現場の外へ連れ出そうとした。

しかし。

「・・・ここに、いる」

か細くも、意志を持った声がして。

「なにも、しないから。ここに、いるだけで、いいから」

体を震わせながら、それでも優作に懇願する。

「・・・とうさんが、してる、こと、ちゃんと、みたい・・・」

その場で優作に縋りつかなかったのは、自分でも言いつけを守らなかった後ろめたさがあるからなのか。

それとも、子供がらなけなしの矜持を絞りだしたのか。

シヨックと恐怖で体を震わせながら、その小さな拳を握り締めながら、その蒼瞳に涙を滲ませて。

優作は腹を決めた。

「なら、ここから動くんじゃないよ。刑事さん達の邪魔になるようなら、すぐに放り出すからね」

何も言わずに頷く息子を残り、優作は捜査に戻った。

その後、現場の検分が終わり、関係者から事情を聴き。矛盾点を優作が検証すると、自ずと容疑者は知れた。

「犯人は、あなたですね・・・」

優作の深い蒼みがかった瞳に射すくめられて、犯人はその場で自供、

逮捕されていった。

その間、新一は言葉を発することもなく。優作を、現場を、呆然と見つめていたようだった。

そして、現在に至る。

犯人がパトカーに連行されて行くのを見送り、優作が新一を振り返った時、新一はただジッと犯人を見つめていた。

・・・その表情には、何の感情も浮かんでおらず。

優作に促され、部屋を出て。

帰路に着こうとしたが、そこまでがどうも限界だったらしい。歩き出して間もなく、道端に口元を押さえてしゃがみ込んだ。

小さな体が、ひくひくとえづいているのを、優作は背中を摩りながら見守った。

何とか吐くのは堪えたようだが、その顔色は真っ青で、足元もおぼつかなくなっている。

えづきが落ち着いたのを見計らって、優作は新一を抱き上げた。そのまま、帰路に着く。

いつもなら恥ずかしがって絶対に抱き上げられて運ばれるなんて事は良しとしない息子が、大人しく腕の中に納まっている事からも、新一の受けた衝撃が大きかった事が知れた。

心の準備も何もなく、凄惨な遺体を目にしたのだ。無理もない。



それでも、最後まで逃げ出さずに現場に居続けた。その精神力は大した物だと思う。

優作は歩きながら考えていた。

今が、この子の、ターニングポイントなのかもしれない、と。

優作に抱かれて帰宅した新一を見て、有希子は驚いたようだったが、優作の表情と無言の目くばせから、理由を根掘り葉掘り聞くことはしなかった。

夕食に殆ど手を付けず、どこか心ここにあらずの新一を、咎め立てする事もなかった。

有希子に促され、風呂へ向かった新一を見送った後、優作は有希子に昼間の出来事を話した。

案の定、大騒ぎになりかけたが、そこは何とか宥めると、新一へ風呂から上がったら書斎に来るように伝言を頼み、優作は書斎に籠った。

やがて。

軽いノックと共に、新一が入ってきた。

「・・・何か、用？とうさん」

「うむ・・・こっちへおいで」

優作が腕を広げると、いつもなら拒否する新一が、大人しく腕の中

に納まった。

そのまま、膝に抱き上げる。

優作は暫く新一を膝に抱いたまま、そのぬくもりを感じていたが、意を決して口を開いた。

「……今日の事、オマエはどう考えている？」

腕の中の体が緊張する。

「……今日見たことは、探偵としての仕事の一端に過ぎない。殺人事件となれば、今日のような、またはそれ以上に酷い状態の遺体を見ることになる。謎を解くことによつて、他人から恨まれる事もあるだろう。自らの身が危険に晒される事だつてある。」

「……」

「実際の探偵は、ホームズのような単なるヒーローじゃないし、謎解きはただのゲームではないんだよ。人の心の闇を暴き、目を逸らしたくなるような事実と向き合い、他人を、自分をも傷つけても、真実を追究する。それが仕事だ。」

「……」

「まだ、今のオマエに、その事実を受け止める覚悟はできていないだろう。だから、今後現場への立ち入りは一切禁ずるよ。わかったね？」

優作は腕の中の新一と目を合わせた。

ともすれば、伏せられるかと思つた新一の目は、しかし多少の畏怖はあつても、逸らされる事なく、優作を見ていた。

「……とうさん……それでも」

一度、俯き、何かを耐えるように頭を振る。

次に優作を見上げた瞳には、小さいながらも決意の色が浮かんでいた。

「それでも、ボクは、探偵になりたい」

優作は瞠目した。

今日の事件で、新一の受けたショックは相当のものの筈だった。それでも、その恐怖を乗り越えても、この子供は探偵を目指す、というのだろうか。

「……全てを受け止める、覚悟がある、と？」

「……そう思う理由を聞かせてくれるかい？今日の事は、オマエも相当ショックだったろうし、恐怖も感じたと思ったのだがね」

新一は、一生懸命、自分の気持ちを表す言葉を探しているようだった。

「……うまく言えないけど……。今日、父さんや他の刑事さん達がしていること、ずっと見てた。遺体は確かにすごく怖かったし、見るだけで気持ち悪くなった。でも……」  
小さな拳が握り締められる。

「父さんが犯人を見つけた時、あの死んでたおじさん、ちょっとだけ、顔が変わったような気がして……」

「……？」

「それまで、本当に怖い、悔しい、って顔だったのに、ちょっと安心したような、嬉しいような顔になったんだ」

「……………なんだって？」

優作は、心底驚いた。

この子は……新一は、この年で真実の声を聞くことができている  
というのか？

「とうさんの言うカクゴってやつ、まだ半分よくわからないけど・  
・でも」

蒼瞳が光を増す。

「ボクは、どれだけ大変なめに遭っても、その“本当の真実”、つ  
てやつを、見つけられる人になりたい」

「……………」

優作は言葉を失っていた。

この子は、既に覚悟ができているのだ。

優作は腕の中の我が子を見つめた。

新一の優作を見上げる、その蒼瞳は一点の濁りもなく、澄み切って  
いて。

「わかった……」

優作もまた、一つの覚悟を決めた。

「ならば、今後、機会があれば現場への立ち入りも、私の指示に絶  
対に従う事を条件に徐々に許そう。探偵としての基本も、少しずつ  
教えよう。ただし、オマエはまだ8才だ。子供に相応しくない、危  
険な現場への立ち入りは絶対に許さないよ。それと、私の指示に従  
わなかったり、現場で他の捜査員や関係者に迷惑となるような言動  
があった場合は、問答無用で出入りを禁止する。」

優作は、ひた、と新一を見据えた。

「その、約束ができるかい？」

「できるよ」

新一は即座にそう答えた。

その瞳には、貌には、小さいながらも精一杯の覚悟が現れていたから。

優作はひとたび新一を抱きしめると、床へ降ろした。

「それじゃ、もう寝なさい。今日は疲れただろう。また、おいおい、話をしよう。」

「うん・・・」

新一はとてとてと書斎から辞しかけたが、扉の所までくると、振り返った。

何かを言いかけては、止める。視線もどこか逸らし気味で。

その姿が、先ほどまでとは明らかに違う。

どこか、もじもじしているような、逡巡しているような。

「・・・どうかしたかい？」

「・・・あのさ・・・」

優作の問いに、少し赤面しながら、やっと言い出した事とは。

「・・・今晚だけ、父さんのベッドで、一緒に寝てもいい・・・？」

優作は堪らず吹き出した。

見れば、新一は真っ赤になって、上目遣いでこちらを睨んでいる。

流石に、一人で寝るのは怖かった、ということか。

ある意味、どこか安堵しながら、

「ああ、いいとも。先にベッドへ入っていなさい。私も風呂を済ませたら早めに行くから」

そう、答えると。

年相応の、安心した笑顔になって、「じゃ、おやすみ！」と、今度こそ新一は書斎を辞した。

新一の去った書斎で優作は、しばらく立ち上がれずにいた。

今日、たった今決めた覚悟が本当にこれで良かったのか否か、まだ揺れている。

今日、新一と交わした約束は、本当に新一を愛しみ、守る立場である親として許されることなのだろうか。

子供を守り、愛しむためだけなら、本来もつてのほかで、許されざる事だ。

その方がよっぽど安全であり、確実に危険なめには遭わないで済む。しかし、天性のものを持つているあの子供は、きっと大人の思惑とは裏腹に、自らその身を危険に晒し、闇に立ち向かっていくだろう。ならば、もし危険な状況に陥った時、それを回避し、突破できる力を。生き延びるための知恵と技術を身につけさせること。それもまた、「守る」事に他ならない。そう、考えたのだったが。

・・・それは、あまりにも危険な選択で。

決して、正しい選択とは、いえないものだったから。

息子を、危険に晒す事になっても後悔しない、という覚悟でもあったから。

優作が寢室に戻った頃には、新一は既に眠っていた。しばし、ベッドに腰掛け、愛息子の寝顔を見つめる。

時々、眉間に皺を寄せ、掠れた呻きとともに寝返りを打つ子供が、恐らく夢の中で恐怖と戦っているのだろうことは想像に難くない。軽く髪を梳いてやれば、その表情が和らいだ。

未だ幼い貌に苦しげな表情を浮かべている息子を見れば、もう先ほどの覚悟が揺らいでしまうのを自覚している。

それでも、自分が一度決めた覚悟を覆すことは、息子にもそれを許す、ということだ。

どれだけ苦しくとも、早々易々としてよい事ではない。

だから。

どれだけ辛くとも、優作は先ほどの覚悟を覆すつもりはない。

それでも。

こうして、まだ自分の手を求めてくれるうちは、求められるがままに与えようと思う。

いつか、この息子も、自分の手など必要としない日がくるのだろうか。

それまでは。

その日が、できるだけ遠ければいい、と、優作は願った。



(後書き)

この父子に、こんな過去があったら、を妄想して書きました。  
親子の絆が、少しでも感じ取って頂ければ幸いです。

感想、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9307s/>

---

覚悟

2011年10月8日23時22分発行